

# 穂別の化石を「むかわ竜」とするの理由

ニュース  
第14号

「むかわ竜」の通称を使わないよう

古生物の学者と研究者、愛好家へのお願い  
北海道恐竜・化石ネットワーク研究会への要請

をしました

「化石の里ほべつを応援する会」は、7月20日に「古生物の学者、研究者、愛好家のみなさん」にお願いします。北海道穂別地区で発掘されたカムイサウルスを『むかわ竜』と言わないでください」との要請文を發表しました。要請文は、①カムイサウルスを蘇らせた穂別の人たちの功績と歴史を大切にしてください。②元々の「穂別恐竜」の通称が、行政の一部の人の謀略で「むかわ竜」に変えられたのです。③古生物学と化石文化が地域住民と心を通わせて発展するために重要な問題だと思えます。④の3点を中心に、会の考えを述べています。

これまでに、108の団体と個人に送られています。更に、10月6日には、「北海道恐竜・化石ネットワーク研究会」宛に、「貴研究会が『むかわ竜』の通称を使わないよう求めます」との要請文を提出しました。この要請文は、道庁知事部局に直接提出し、他の行政委員会や振興局、市町村の会員の方々18人には郵送しています。この「ニュース14号」では、「北海道恐竜・化石ネットワーク研究会」宛の要請文を掲載し、「古生物の学者、研究者、愛好家のみなさん」にお願いします。」は、ニュースに添付してお届けします。

北海道恐竜・化石ネットワーク研究会への要請文は「むかわ竜」との「通称」は、「深い探求と理論的な考えを基本とする古生物学の精神」と「多様な価値を創造する化石文化の特徴」、「住民を意思決定の主体とする自治体行政」のいずれにも反するとし、4つの理由を挙げています。

第1の理由は、学名がこの化石の特徴を伝え、ロマンを与えるものになっているのに、「むかわ竜」との「通称」はそれを2重、3重に損なう通称だからです。

1.カムイサウルスが発掘された地層を間違えて伝える「通称」です

昨年5月12日の北海道新聞の「読者の声」に福井県の山下さやかさんの投書が載っておりました。この方は、15年前に鷗川のたんぼ公園を訪れたことを書いた後に、「出土されたむかわ竜も私と同じ空間を歩き、うっとうしと眺めていたかも・・・」と、ファンタジーの夢をふくらませた様子を書いていました。福井県の人だけでなく、北海道でも「むかわ竜」と聞いて、「カムイサウルスの化石が鷗川地区で発掘された」と思っている人が相当居ることは、私たちの身の回りの人たちの反応からも明らかになっています。

2.学名が示す価値とロマンを覆い隠す「通称」です。

小林快次教授は、「カムイサウルス・ジャポニクス」の学名について、「日本の恐竜化石の中で一番保存の良い全身骨格で、日本を代表する恐竜であり」「日本の恐竜の神」という意味を込めた」と言っています。マスコミでは、「カムイサウルス・ジャポニクス」(日本の神の竜)とも報道されています。

(中略)

鷗川の地層は地球の歴史上一番新しい千万年前以降の地層で、ここから太古の化石は出土されません。

カムイサウルスは、(中略)今から7千万年以上前です。これが穂別の地層の特徴で、プレート移動の地殻変動など地球が変容していく「動く大地」の時代考証の史料です。ですから、北海道遺産の登録・選定も「むかわ町穂別地区の古生物化石群」と地層との関係を重視し、「むかわ」でなく、穂別地区としています。

「カムイサウルスが鷗川の地層から発掘された」との誤解を与える「通称」はふさわしくありません。

(詳しくは、当会ニュース3号、12号)

第2の理由は、「むかわ竜」との通称は、行政の一部の人が、元々使われていた「穂別恐竜」

との通称を謀略的なやり方で使えないようにしたうえで、町として何らの会議も行わずに、町長が突然言い出したに過ぎなく、何の正当性もないことです。

「カムイサウルス」の化石が「恐竜化石の可能性が大きい」と公式に言われたのは、2013年9月～10月の

第一次発掘調査計画を發表した同年7月の記者会見です。これを受けて町は大いに沸き立ち、化石は「穂別恐竜」の通称で呼ばれるようになりました。そうして、2014年初めには、穂別博物館発行の「ホッピーだより」や

町の「広報むかわ」でも「穂別恐竜」の通称が使われ、2014年～15年には新聞やテレビ、科学雑誌でも「穂

(詳しくは、当会ニュース3号、6号)

別恐竜」の通称を使うようになります。このようになか、むかわ町は2015年になると、突然広報などの町の出版物や町の行事で「穂別恐竜」の通称を使わないばかりか、恐竜化石と穂別が連なる言葉を使わないようにし、「むかわの恐竜」などの言葉を使うようになります。マスコミでは、「穂別恐竜」との通称が使われ、むかわ町内でも住民が使っているのに、むかわ町が行政の文書で突然「穂別恐竜」を使わなくなった理由は一切述べ

化石の里ほべつを応援する会

2020年10月15日

連絡先  
☎・FAX 011-385-8368 田中弓夫  
Mail: yytanaka@palette.plala.or.jp  
HP: http://kyouryu-hobetsu.net

裏面もご覧  
ください



られていません。

このような経過を経て、2016年12月3日に竹中町長が講演会の挨拶で「町内で発見された恐竜化石の総称を『むかわ竜』とする」と言い出します。しかし、「むかわ竜とする」ことを論議し、決めた会議は一切おこなわれていないことは町も認めています。

このように化石と地層の関係や化石を蘇らせて来た地域住民の歴史

### 第3の理由は、半世紀前から地層と化石に着目したまちづくりをすすめ、「カムイサウルス」を蘇らせた地域の人たちが喜んでいる通称でないことです。

町長の発言直後から、穂別地区では「どうしてむかわ竜なのか」との疑問や抗議が噴出しましたが、町はまともな説明をしませんでした。4ヶ月後の2017年3月の町議会では、穂別地区の議員が「穂別地区では、通称について認識の違いや喪失感を持つ人が多い」と発言しています。

抗議や疑問が広がるなか、行政はやっと2017年4月と9月に「通称」についての文書をニュースに載せます。しかし、これが嘘のいい加減な文書だったこともあって町民の理解を得ることができず、2018年には通称変更を求める住民署名が始まり、同年9月には、穂別地区（旧穂別町）の有権者の4割を超える974人が、通称の変更を求める署名を提出します。「穂別の化石と地層」に着目して、国内外の研究者や愛好家から親しまれ、何度もマスメディアで紹介された「化石とロマンの里づくり」を半世紀以上も進めて来た地域の人たちから

### 第4の理由は、「むかわ竜とする」ことに疑問や抗議の声を上げる町民に、

町は嘘の説明をおこなってしまってきました。

3項で紹介したように、町長が言い出した翌日から、穂別の人たちから疑問や抗議の声が上がりましたが、町はこれを無視し続けました。しかし、それが広がるのを無視できなくなり、4ヶ月も経ってやっと「説明」なる文書を広報折り込み資料の裏面に載せました。しかし、それでも町民が納得しないため、その6ヶ月後に、『むかわ竜』かわら版」の裏面の最後に「説明」文書を書きました。

しかし、これらの「説明」はいい加減な嘘で、その内容に対する疑問や質問には、未だに答えていません。そればかりか、町民には何の

## 会は通称問題とは別に、左記の2つのことを研究会に申し入れました

一つは、平成30年8月発行のパンフレット「恐竜・化石を活かした地域づくりの方向性」で、「目指す姿」について、「化石を発掘し、地域の宝として育ててきた歴史と風土を学ぶ」ことも位置づけていたのだと思います。

2017年5月8日に日本古生物学会が会長声明を発表しました。この声明は、「化石は、過去の地球や生物界の様子を記した最も重要な物的証拠ですが、その発見から発掘・収集・保全・収蔵整理・研究・展示・社会教育に至るまで全てに関わっているのが博物館の学芸員です」と述べた後で、「彼らが標本・資料に新たな価値を付加し続けてくれるおかげで、常勤の学芸員がいる博物館では、地域や規模の大小にかかわらず、学術的レベルの高いユニークな展示や社会教育が行われており、その活動は国内外から高く評価されています。」と強調しています。

ここで言っていることは、発掘から8年間クビナガリュウの化石と思われる保管されていたこの化石を「恐竜の化石では・・・」と示唆して蘇るきっかけを作った佐藤たまき東京学芸大学准教授が、「穂別は幅広い年代の化石が出ていて、生物の生態系解明調査に重要な地区で、穂別博物館は標本の所蔵が多く、学芸員が常駐して学術研究をサポートしており、外部の研究者が安心して利用できる」と研究のために度々来館していたことや、小林快次教授が2019年発行の著書「恐竜まみれ」で、カムイサウルスに触れた「ついに出た 日本初の全身骨格」の章で、「ある学芸員の執念」との節を設けて、穂別博物館の櫻井和彦学芸員（現館長）の功績を紹介していることと重なります。それだけに、70年前から住民が化石に親しみ、旧穂別町が40年も前に困難な財政の中で全国でも珍しいと言われた「化石に特化した

や気持ちをもった考えずに、元々の通称を使えないようにして、町長が突然別の通称を言い出したのはむかわ町が初めてです。また、「町名を通称にした」と言っているのも、長い恐竜化石の歴史の中でむかわ町だけです。

（詳しくは、当会ニュース2号、5号、6号、12号、13号）

これだけの異議が出る化石の通称は前代未聞です。そればかりか、19都道府県から3612の人たちが「通称を正すように」との署名を寄せています。

974人が署名した請願は、議会でも不採択になりました。しかし、この議会では、「請願理由には見解の相違がある」と請願の内容を否定できませんでした。その一方で、請願者が求めた「決定過程の問題や担当者の議会での発言の調査」を行わず、「資料提出の要請」にも応えませんでした。そのような状態で、請願を不採択にしましたが、不採択の理由は、「行政の一部の人が言っていることの繰り返し」と「決まって、進んでいることを後戻りさせることはできない」と言うことだけです。地方自治で重要な「行政運営を監視する議会の役割」を果たしませんでした。

（詳しくは、当会ニュース2号、8号、10号、11号）

、

釈明もせずに、議会では当初の説明と異なる嘘の説明を言うてごまかし続けています。

古生物学は、高度の鑑定能力と鑑定に基づくデータ研究によって理論体系を構築していく、極めて精緻で厳格な学問です。このような古生物分野に、嘘を含めたいいい加減な態度を持ち込んだのは、むかわ町が最初であり、最後になるでしょう。

（詳しくは、当会ニュース4号、5号、7号、8号、9号、13号）

博物館」を建設し、学芸員も任用して、「森と化石とロマンの里づくり」を進めてきた功績とその歴史を後世に伝えていくことが重要です。

このようなことは、穂別地区だけでなく、貴研究会が着目している地域ではどこでもあると思います。その歴史と風土、住民の功績が、新しい世代に受け継がれていくことを、「恐竜・化石が有する価値の継承」の中に、項目として位置づけていただきたいと思います。

（中略）

もう一つは、マップでは市町村名でなく、地層が引き立つように地名を重視していただきたいと思います。

その（前項の）意味で、前記のパンフレットの3ページ「2、恐竜・化石が有する価値の継承」で、新生代の化石で「ナウマンゾウ（忠類）」、「アスモスチルス（歌登）」として、化石と結びついた地名である忠類や歌登を記入しているのは大事な見識だと思えます。しかし、このページで穂別地区から発掘された化石だけは、全て「むかわ」になっています。むかわ町の地層については前述しましたのでここでは繰り返しません。むかわは行政を行う機関名であって地名ではありません。忠類や歌登のように化石と結びつく地名である穂別としていただけないでしょうか。穂別町は2006年に鶴川町と合併してむかわ町になりましたが、同じ2006年に忠類村は幕別町と合併して幕別町になりました。歌登町は枝幸町に編入して枝幸町になりました。さらに、北海道遺産協議会がむかわ町穂別地区の古生物化石群を北海道遺産と選定したことから旧穂別町で発掘されている化石だけを（むかわ）とするのは妥当でないと考えます。

## 9月末の署名数は1021筆です 次の集約は11月末です

新型コロナ禍で、集まりや訪問の機会が減り、署名の呼びかけに苦勞しています。12月末迄取り組んで、その後の検討をします。署名用紙は同封しましたが、会のホームページからダウンロードすることもできます。